

ごみ漂流

3

東北道・久喜インターに近い埼玉県宮代町。久喜宮代衛生組合のごみ処理場内の倉庫に、黒っぽい木くずが2層近い高さまで積まれていた。放線菌など12種類の微生物が投入された240立方メートルの「菌床」だ。生ごみを投入すると、24時間で9割以上が二酸化炭素と水に分解処理され、姿を消す。ガスは大気へ。水も大半が発酵熱で蒸発。残りは堆肥になるのだという。

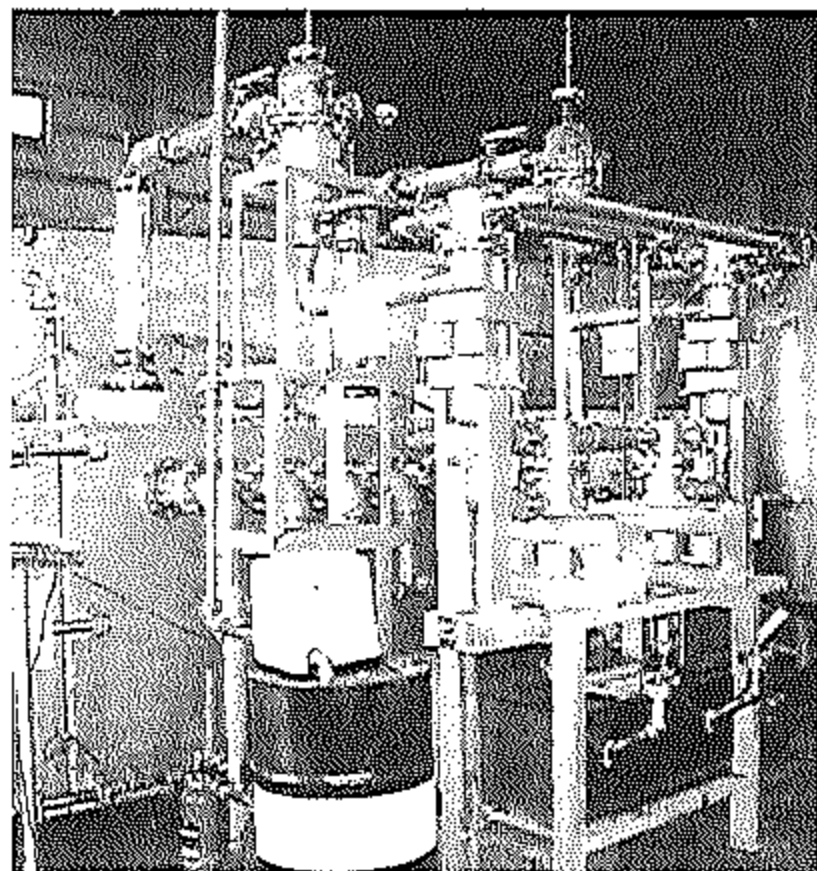
「心配していた臭気もほとんどない。そんなに場所もとらない」。昨年12月、同組合を視察した小金井市ごみゼロ化推進会議の加藤了教さん(69)は満足そうだった。

*

小金井市が可燃ごみの処理を周辺自治体に頼っている状況を受け、加藤さんら市民の有志が新しい処理方式などを探り、注目したのは、ダイオキシン類など有害ガスが出ない「非焼却」方式だった。

小金井と同規模の人口約

堆肥化、炭素化でエコ処理



①生ごみを分解処理する菌床(宮代町で) ②炭素化装置のテスト用プラント(製造会社の「EEN」提供)

10万5000人を抱える同組合はモデル地区(約1万世帯)で可燃ごみから生ごみを分別回収し、「菌床」のシステムで年間800ト前後を処理する。業者への委託費は年間約1200万円、1トあたり約1万5000円。焼却方式の半分で済むという。

「環境に配慮し、ごみ焼却を少しでも減らしたかった」と組合の担当者は言う。ただ、この施設規模で処理できるのは小金井の可燃ごみ(2008年度約1万6000ト)の5%分だけだ。

煙突のない非焼却方式を追い、沖縄県中部のうるま市へ昨年10月に飛んだのは、斎藤康夫さん(54)ら小金井市議8人。工業団地の一角約1500平方メートルで、ごみを1日100ト処理できる「炭素化装置」のプラント建設が進んでいた。

業者によると、窒素を充填した熱分解炉を電気で450度に加熱すると、ごみは二酸化炭素やダイオキシン類をほとんど出さず、土壌改良材などに使える炭素に姿を変え、プラスチックは油として再資源化できるといふ。焼却場の移

転計画が難航している立川市が2月から、1日750トの廃プラスチックの処理に向け、実験を始める。

「炭素化や、生ごみの堆肥化を組み合わせてもいいのでは」。ごみのメタンガス化や合成油化など全国の非焼却施設を研究してきた加藤さんの提案だ。

*

小金井市は、建設を目指す新処理場の方式について「焼却が基本」(稲葉孝彦市長)と繰り返す。「リサイクルを進めたいうえで焼却し、熱エネルギーを回収する方が現状ではベスト。衛生的で処理量も安定している」(東京二十三区清掃一部事務組合)といった「焼却支持」が多いのが現状だ。しかし、焼却による排ガスなどへの反発は根強い。まだ実績の乏しい非焼却方式も、処理場建設にあたっては、環境、コスト、ごみ減量などの観点から、検討テーマに浮上してくるのは間違いない。